

ローマ人への手紙4章5節の意味を教えてください。

「しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。」(ローマ人への手紙4章5節 新共同訳)

これはとても大事な教えです。どんなに社会的、あるいは信仰的に立派な人にも罪があります。罪のない完全な人なんか存在しません。そこで、そのような人間が、これこれ、かくかくしかじかの行いをしたから義とされると意味では決してなく、むしろ、不信心な者さえも自らの死によって恵みの内に購ってくださる方、義としてくださる方を心より信じるならば(すなわち贖いの死と勝利の復活を信じるならば)、たとえ、救われるにふさわしい、いわゆる立派な行いがなかったとしても、あるいはまだできてはいなかったとして義と認められる(信仰義認)という大切なことをパウロは教えているものと思われま

す。念のため、行いの伴わない信仰は所詮信仰ではありません。救いの信仰の原点があればおのずから行いも伴ってゆきます。それが真の信仰ですので、くれぐれも誤解のなきようお願いいたします。

参考までに、義と認められるの部分はギリシャ語テキストではλογίζομαι (ロギゾマイ reckon, account, ---みなす、評価する、数える) の直説法現在三人称受動態形であるλογίζεται (ロギゼタイ) が使用されており、主な訳もおおむねそのようになっています。

「しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである。」(口語訳)

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」(新改訳)

But to him that worketh not, but believeth on him that justifieth the ungodly, his faith is counted for righteousness. (ジェームズ王欽定訳-KJV)

..... his faith is reckoned as righteousness. (RSV)

..... his faith is reckoned as righteousness. (NAS)

..... his faith is accounted for righteousness. (NKJ)

.....their faith is credited as righteousness. (NIV)

.....his faith is regarded by God as righteousness. (Twentieth Century New Testament)